

【月刊】

URL: http://www7b.biglobe.ne.jp/~catch_peace2008/

キャッチピース

今月の一枚



No. 162

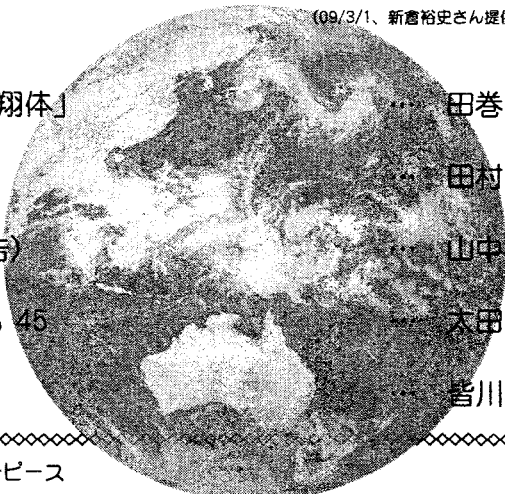
通巻 239 号
2009/04/20



ソマリア沖への海上自衛隊派遣に反対する海上行動
(09/3/1、新倉裕史さん提供)

この号の内容

- 日本上空を通過した「謎の飛翔体」……………田巻 一彦
- 愛宕山に星条旗はいらない……………田村 順玄
- 青木雅彦さんを偲ぶ会 (報告)……………山中 悦子
- オキナワから トウキョウから 45……………大田 武二
- オキナワの基地の一ヶ月……………皆川みずる



編集発行人 ● 脱軍備ネットワーク・キャッチピース

● 維持会員 (月額) 個人 1口 1,000 円 団体 1口 2,000 円 ● 参加会員 (月額) 個人 1口 500 円 団体 1口 1,000 円

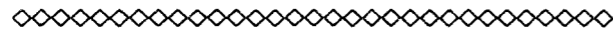
● 通信会員 (年額) 1口 3,000 円

(会費には本誌購読料が含まれます)

日本上空を通過した「謎の飛翔体」

あれは、「失敗した衛星打ち上げ」だった
いたずらに緊張を煽るのは愚の骨頂
MDも制裁も事態の解決にはならない

田 巻 一 彦 (キャッチピース/ピースデポ)



4月5日の午前11時30分頃に朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の東北部・ムスダンリ(舞水端里)から、「宇宙発射体 (SLV)」が発射され、日本列島を飛び超えて太平洋のかなたに消えていった。SLVに搭載していたものを北朝鮮は「人工衛星」といい、日米政府は「弾道ミサイルだ」と非難した。

日本の国会では、「ミサイル発射非難」の決議が採択(4月7日)され、これを背景に日米政府は、国連安保理に新しい制裁決議を上げるよう求めた。その結果は、安保理「制裁決議」ではなく「議長声明」という形で発表された。4月13日のことだ。議長声明は「ミサイル」という言葉を使わずに、たんに「発射」という言葉を使った。それにはこれを「ミサイル」とは呼べない事情があった。

実は、今回発射されたSLVに搭載されているのが、北朝鮮が言うとおりの「人工衛星」であることを1ヶ月前から認識していた。発射間際になって公開された民間の衛星写真も「人工衛星」を強く示唆するものだった。過去の公表データを下に北朝鮮のSLV(銀河2号と呼ばれる)の能力を評価した専門家も、このSLVには長距離弾道ミサイルを飛ばす能力はないとの見解を示している。日本政府も4月5日には「ミサイル」ではなく「飛翔体」という言葉を使った。

たしかに、北朝鮮によるSLV発射はたとえ「人工衛星」だったとしても、大きな問題になる理由はある。「人工衛星」も「弾道ミサイル」も、打ち上げ技術だけを見ればほとんど同じものだからだ。どちらもいったんロケット・エンジン大気圏外にまで打ち上げられる点では同じだ。人工衛星の場合にはさらにスピードを上げて、搬送物(ペイロード)＝人工衛星を高度400キロぐらいの地球周回軌道に投入する。弾道ミサイルは、最高高度に達した後は重力にしたがって落下してゆく。これを技術の「共用性」と呼ぶ。

しかも、北朝鮮が人工衛星を地球周回軌道に乗せようとするれば、太平洋に向かって日本を飛び超える方向に発射するのがもっとも有利になる。人工衛星を軌道に乗せるためには地球の自転(西から東)を使って「速度をかせぐ」必要があるからだ。これがますます事情を複雑にする。

かつて米ソの大陸間弾道弾(ICBM)開発競争は「人工衛星」競争と一体で展開されていた。そのように「両用技術」を開発して弾道ミサイルを手にしてしまった米国に北朝鮮を非難する正当性があるのかと、「安保理議長声明」に反発して「6か国協議からの離脱を」表明した、14日の北朝鮮外相声明は言う。この怒りにも一分の利はあるといわねばならない。

北朝鮮のSLV打ち上げはなぜ問題なのか

この「衛星発射」、どうやら失敗だったらしい。NORAD(北米宇宙防衛司令部)は軌道には何も投入されていないと発表したし、北朝鮮が衛星から地上に送っていると言った革命家を誰も聞いてはいない。そのことはさておくとしても、やはり今回のSLV打ち上げは、大きな問題だといわねばならない。

北朝鮮は、衛星発射への非難はすべての国が持つ宇宙開発の権利を侵害するものであると主張する。これは一面において正しい。だが、大事なことは北朝鮮の「SLV技術」が核兵器と結びつく可能性を無視して議論はできないということだ。2006年10月の核実験は、これも失敗だったとはいえ、北朝鮮が核兵器開発の道歩んでいることを明らかにした。そのような経過の中で行われた「衛星打ち上げ」を「宇宙開発の当然の権利の行使」と説明されても、誰も納得はできないだろうと筆者も思う。しかし、日米政府の過剰反応は火にあぶらを注ぐだけのものでしかない。

06年10月の核実験に対して国連安保理が採択した「決議1718」は、すべての関係国に「外交努力を強め、緊張を激化させる可能性があるいかなる行動も慎む」よう求めた。今回、各国の自制要請を振り切って衛星打ち上げに踏み切った北朝鮮が、「緊張を激化させた」ことは間違いないが、一方で3月9日から20日にかけて米韓が大規模な合同演習「キーリソルブ/フオウル・イーグル」を行い、北朝鮮がこれを「我が国に対する侵略演習である」と激しく非難していたという経過を忘れてはならない。どちらも、「緊張を激化させる」行動をとっていたのである。その中での「衛星発射」だった。

4月13日の国連安保理議長声明を採択したこと、そして北朝鮮が強く反発し、14日の外相声明で6か国協議にはもう二度と出ない、核開発を再開するといっていること、これらが今後どのように展開してゆくかを予測することはできない。6か国協議は05年9月19日、「平和的な方法による、朝鮮半島の検証可能な非核化」を目指すことを全会一致で確認した。その到達点さえ無に帰すようなことだけは避けなければならない。日本政府、議長声明をもって、まるで「鬼の首をとった」ようにはしゃいで、追加制裁に走っているが、それは余りにも無責任な態度というべきだろう。

そもそも、日本政府の対応は、滑稽そのものだった。パトリオットミサイル(PAC3)を秋田県などへの移動展開し、防衛大臣に「ミサイル破壊措置命令」の権限まで与えたのである。仮に人工衛星やロケット推進体が「丸ごと」日本に落ちてきて、迎撃にPAC3が幸いにも成功したならば、その破片が広範囲に飛び散り、被害はさらに拡大したかもしれない。日本政府は、国民を本気で守るというよりは、これを機に1兆円英上を投入して整備しているミサイル防衛システムの「市民権」を一挙に向上させようとしたように見える。この手にだけは乗ってはならない。だが、PAC3は、性能が「怪しいことでは定評がある」兵器だから、実際に「破壊措置命令」が出されなくて誰よりも胸をなでおろしているのは、防衛省、自衛隊ではないかと思う。

ミサイル軍縮・管理枠組みが必要

残念ながら、現在の国際社会には「弾道ミサイル」を禁止する取極めはごく一部をのぞいては存在しないのである。だから今は人工衛星だろうが、ミサイルだろうが、開発も実験も誰でも自由にできるのである。

今回のSLVは「テポドン2」ミサイルと同系統だと考えられているが、それが脅威というならば、日本を射程におさめる「ノドン・ミサイル」(300発実戦配備、との情報までである)の方がよほど深刻な脅威のはずだ。真剣に北朝鮮のミサイルを「脅威」だと認識するならば、日本政府は北東アジアにおける「弾道ミサイル軍縮枠組み」を提案し、すべての弾道ミサイル保有国、つまり北朝鮮、中国、ロシアそして米国の含めた交渉を先導すべきなのに、そのようなことを言う政治家は一人もいないのはどうしたことなのだろうか。口を開けばMDだ、果ては「対ミサイル基地攻撃能力」を持ってだと叫ぶ政治家たちこそ、危機感が薄いと筆者は思うのである。

「潜在的能力」がありながら、平和憲法によって「弾道ミサイル」を保有しないという道を選んでいる日本にはそれができるはずだ。もっとも、日本は核の傘と同様、米国の「ミサイルの傘」の下にあることを問うことなしに、その交渉は始まらないだろう。ミサイル軍縮交渉の対象には、在日米軍基地に配備された米海軍艦船の巡航ミサイル・トマホークも含まれるべきだろう。

どの国のミサイルもいけないのだから。(たまき かずひこ)

「愛宕山に星条旗はいらない！」

岩国市議会議員 田村 順 玄



岩国

抗議の紙飛行機

山口県岩国市。はるかに瀬戸内海を望む丘の上に愛宕山の開発事業跡地がある。海岸線には米軍基地や工場地帯の煙突も…。こうした市街地に隣接する一等地に広大に広がる愛宕山開発の跡地をバックに、周辺住民など約 2,000 人が集まり米軍住宅建設反対の大集会が 12 日に開催された。

会場は地域の人々が里の氏神として 300 年前から敬う、移転・新築した愛宕神社前の小公園。筆者の自宅もある「百合ヶ丘」と呼ぶ団地の一角に隣接する。目の前には 60 ヘクタールという広大な用地が有りながら、現在の所有者である山口県住宅供給公社は跡地の会場使用を一切認めず、駐車場としてでも使用は叶わなかった。やむを得ず会場までは数キロメートルを徒歩で参加という厳しい条件での集会開催となったが、それでも参加者は黙々と歩いたりタクシーの相乗りなどで会場を埋めた。

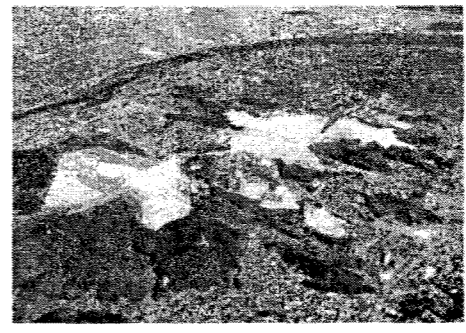
進行は市民が主役、地元の国会議員以外来賓や目立つ大物ゲストも特に迎えず、地元住民中心の素朴な訴えだけだったのが会場は大きく盛り上がった。

まず地元から、「愛宕山を守る会」の岡村寛代表は先日防衛省へ提出した 11 万筆の署名の報告とお礼を述べ、続いて井原勝前市長がこの間の運動の体験とこれからも体を張って愛宕山を守ると強い決意を表明した。その後を 4 名の愛宕山周辺住民が個性あふれる訴えを続け会場の共感を呼んだ。

愛宕神社の氏子の一人として 70 年間この地に住む山本久さんは、消された神社参道の復活を訴え、自治会長の村尾俊之さんは市民の心を結び付けた「11 万署名」集めの体験を熱く語った。開発地から一番近い団地住民の福田雅美さんは、市民の現場の声を聞かない政治の不信を糾弾した。事実岩国市長や山口県知事は 260 億円という巨額の負債を生んだこの事業の現場に未だ一度も足を運んでいないのが現実である。

愛宕山に米軍住宅も米軍施設もいらない!

4. 12 愛宕山大集会



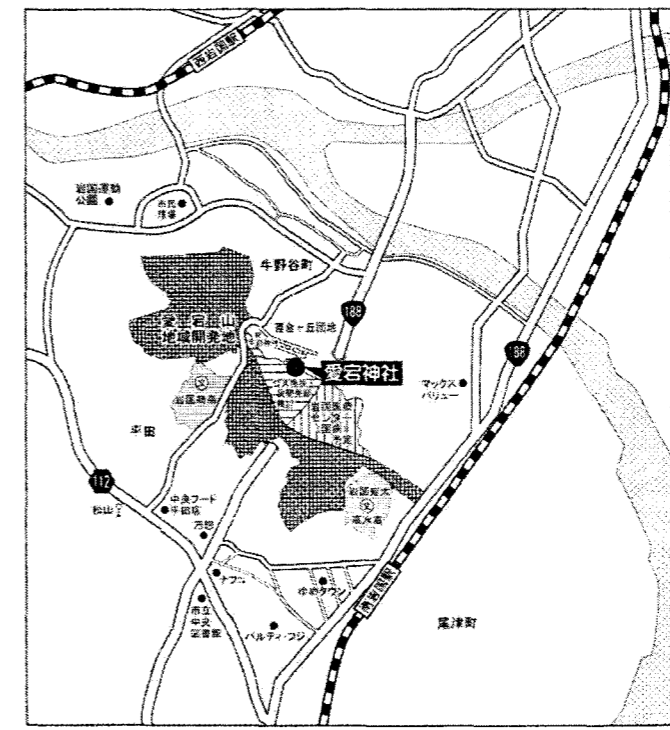
日時：4月12日(日)
15時~16時
場所：愛宕神社前公園
岩国市牛野谷町3丁目百合ヶ丘団地内

※駐車場がありませんのでバスか電車でご参加ください。
JRの最寄駅は南岩国駅からタクシーで1000円余で、4人乗り合いで300円弱です。市営バスは松山です。裏に地図があります

「愛宕山に米軍住宅はいやだ」は市民の強い思いです。国はアメとムチの圧力を揃め、米軍再編をこり押ししようとしていますが、市民の反撃も10万人を大きく突破した米軍住宅反対署名や福音教団に怒りの「懸念訴訟」提訴で盛り上がっています。4・12大集会を成功させ米軍住宅、米軍施設の阻止を!

主催：「4・12 愛宕山大集会実行委員会」
実行委員長： 岡村 寛 (愛宕山を守る会)
副実行委員長： 斎藤邦昭 (議員有志の会)
連絡先： 岩国市牛野谷町1-5-3、電 話： 090-4807-1538

愛宕山を米軍に提供するような署名にだまされてはいけません。愛宕山跡地は米軍・市民共用の施設ではなく、市民のために有効な活用を求めましょう。



交通アクセス (バス牛野谷線は便なし)
JR山陽本線(上り)
小部 防府 徳山 光 柳井 南岩国
11:47 12:03 12:31 12:44 13:04 13:32
13:02 13:16 13:36 14:05
12:34 12:54 13:30 13:44 14:04 14:34
JR山陽本線(下り)
広島 廿日市 岩国 南岩国
12:33 12:51 13:21 13:26
12:55 13:12 13:42 13:48
13:10 13:28 14:09 14:14
※ 南岩国駅がワンルームで4人〜人300円程度です。
岩国線の場合も西岩国駅が同程度です。
バスの利用については平田松山住宅で下車して30分程度徒歩になります
平田・県営黒磯方面または平田・県営黒磯方面
今津 裁判所 錦帯橋 川西 松山
13:29 13:37 13:43 13:46 13:53
13:54 14:02 14:08 14:11 14:18
備前右回りまたは平田・県営黒磯方面
大蔵 空港前 南岩国駅 梅ヶ丘 松山
13:25 13:32 13:47 13:40
14:19 14:25 14:41 14:44
※車の乗り合いで来られる方は団地入口で降車し錦帯橋河原等に駐車され団地内には絶対に駐車しないで下さい。

住民発言の最後は88才の女性、末岡静枝さん。かつて筆者も卒業した地元の愛宕小学校で教壇に立った元教師で、同校の校歌でも歌われた「愛宕山」がこんな無残な姿にされた事は許せないと怒り、この高齢を押して自分は爆音裁判にも立ち上がったが判決を聞くまで頑張る！と参加者に強い感動を与えた。

戦後63年間、岩国基地では米軍機の爆音被害に悩まされながらも裁判が闘われなかった。その「爆音裁判」が3月23日、476人の原告で提訴され画期的な闘いがスタートしたところなのだ。

集会の圧巻はこの後に続いた参加者全員でのパフォーマンスで、唱歌「ふるさと」の大合唱とのぼり旗のシンボルマークをプリントした紙を一斉にかざす総行動だ。司会者の合図で会場全体は黄色一色に埋まった。

フィナーレは「平和の紙飛行機」、前夜から世話人らが新聞のチラシを使い「厚木から来る59機の艦載機に負けるな！」と、一人が最低59機以上は折って持参し会場参加者に配付した傑作だ。久しぶりに童心に帰り、参加者は雲一つ無い青空目指し一斉に紙飛行機を飛ばした。風に乗った何機かは、フェンスを越え彼方の開発跡地へ飛んでいった。

こうして「4・12愛宕山大集会」はこの地に絶対、「星条旗は立てさせない」という固い決意、そして更なる運動の継続を誓い会って大成功した。

愛宕山をめぐる状況ではこの集会も僅かな一コマ以外に過ぎず、他にも刻々と事態は動いている。今も多くの報告すべき事項が山積するが本稿では集会の様様に留め、これからも一人でも多くの人々がこの愛宕山の現場を目にして、国や県や市が行ってきたことを確認してほしいものと待望する次第だ。

そして、この地に米軍住宅建設を認めること・即ち日米政府が押しつける「米軍再編・艦載機移転」という結果につながることを体感して頂き、更に運動の拡大に手を貸して頂きたいと念願する。もちろん、私たちは奮闘し続ける。

(たむら じゅんげん)



愛宕山大集会 (4/12)

青木雅彦さんを偲ぶ会 報告

山中悦子(キャッチピース運営委員)

青木さんのキャッチピース記事

桜の花びらが舞う4月半ばの土曜日の午後、キャッチピース全国運営委員の一人として「月刊キャッチピース」でたくさんの提言を発表してきた青木雅彦さん(反戦ドタバタ会議)を偲ぶ会が京都市内堀川で開かれました。青木さんは1年前の2008年3月19日、ふるさと丹波篠山で亡くなりました。享年52歳でした。



20余名参加の小さな集まりでしたが、「自衛官人権ホットライン」の呼びかけ人をつとめられた鶴見俊輔さん(哲学者)、同じく中村尚司さん(龍谷大学)も出席されました。鶴見さんは入院中の病院からドクターストップをおしてのご参加でした。

鶴見さんは青木さんとの17年間の付き合いの中で、彼が人を殺さず、誰かに人を殺させないような努力し続けたことに敬意を表し、自分も青木さんのようにありたいと語りました。

また、彼とは「何をして食べていくか」の話をしてこなかったと振り返りました。誰もが、食べる(生きる)ことを可能にする仕事と、限りなく続く運動との両立に苦勞するが、青木さんには働くという生きる方法が欠落していたかもしれないと述べました。

当日は自衛官ホットラインの足立さんが司会進行役をつとめられ、偲ぶ会開催に至る経緯、彼の足跡紹介をされました。そして足跡に合わせ、その時々関わりを持った方々から思い出話が披露されました。



偲ぶ会で発言する鶴見さん (4/11)

彼がこの世界で活躍するようになったのは京大生時代。世界情勢を変えなければとの思いから始めたとのこと。学生仲間三人での「三角デモ」、「三田ナイキ阻止共闘委員会」、「反軍フォーラム」、「基地基地バツタ」などを経て、1983年の「反戦ドタバタ会議」ス

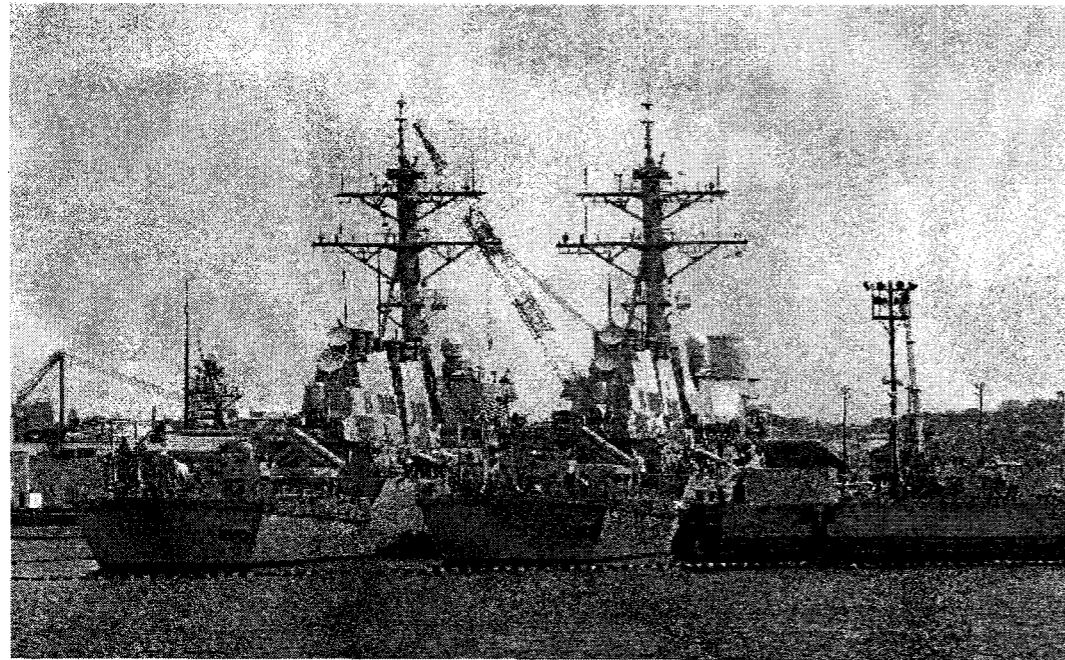
タート。さらに「トマホーク阻止京都連絡会（トマ連）」への参加と脱退、キャッチピースへの参加、「No More War」発信などの活動が語られました。楽しい思い出話もたくさんでした。

青木さんが、類まれな情報収集能力（英語資料を含む）と分析力をもって、耳を傾けるべき提言をたくさんしていたことにも話が及びました。キャッチピースは、1992年に「トマホークの配備を許すな全国運動」を母体としてスタートしましたが、青木さんはその当時から数年間、「月刊キャッチピース」にもいろいろ書いてくれました。提言に共通するのは軍縮をぜったい実現しようとする必死の思いです。理想を掲げるだけの平和論を否定し、自衛隊が存在する現実を前提とした軍縮を具体的にどう実現するかをロードマップで示しました。そのひとつが内外に大きな波紋を広げた「ハーブオプション」です。

「・・・日本人の好きな抽象論・一般論・水掛け論（憲法解釈論）に終始して何一つ決まらず、結果的に『軍拡派』を利するという悪しき先例・・・」（キャッチピース No12）、「・・・理念も理想もなく目の前の『成果』だけを手に入れようとする運動は貧しいが、現実世界での敗北ゆえに、『理念』や『究極の理想』に避難所を見出す運動は単なる怠慢である」（同 No.27）などに青木さんの思いが読み取れます。具体的には軍事費に関する原稿が多く掲載されました。

私的なことを多く語らず、最後は故郷丹波篠山に戻り人知れず亡くなった青木さん。生きることに食欲になれなかった彼の死をみんなが惜しみました。「あなたは、あなたが考えていた以上に皆に愛されていたのですよ。」という京都の仲間からのメッセージは届いたでしょうか。

（やまなか えつこ）



ミサイル・ディフェンス対応艦がそろった横須賀基地（09/4/3、リムピース提供）



座り込み 1830 日 (09/4/22 尺野中邦典画)

桜の季節に

今年の4月1日は、前号で報告した沖縄ツアーに引き続き「やるっきゃない」第二段の沖縄行動から帰ったばかりの超忙しさの中で迎えました。例年この時期に一番季節と新年度だなあと感じるのは、やはり桜とフレッシュマン。

桜のほうは自然の奇跡のような美しさに心奪われ、開花から桜吹雪が舞う前後の日々は首都圏のどこに居ても好い感じで、感動しっ放しなのですが、にもかかわらず朝起きて何となく気持ちが落ち込むのは、通勤の満員電車。それも満員電車でのマナーに慣れていないというか、どうしようもない身体の接触を力任せに押し返す若者や男女を問わず優先席でも座って文字通り眠りこけているフレッシュマンたちを見るにつけ、「賃金奴隷」から最近流行の「蟹工船」ならぬ「奴隷船」をも連想。それでも今年の春は、毎朝通勤が出来るだけでも幸せというほど一段と経済、雇用情勢が厳しさを増しているのは周知のことです。

そして、その経済危機が深まる度合いに応じて、歴史的に繰り返されてきた政治と平和、人権の危機が深まっていると感じている皆さんも多いのではないのでしょうか。

実は3年前の9月、祥伝社から副島隆彦著「戦

争経済に突入する日本」が出版され、当時から彼の本の愛読者だった私は、昭和恐慌から戦争への道に突き進んだ歴史が再び形を変えて繰り返されようとしているという警告を現実のものとして受け止めていました。改めて読み返してみると、その後の世界経済の危機の深まりと日本の対米追従、国民管理体制とマインドコントロールの強化という今日的状況がまさに予告されていました。その具体的な表れが、2014年までの日米軍事再編であり、それは、前号に書いたとおりです。

過去と現在、4月1日とは

前号で報告したように4月に向かう沖縄では、嘉手納基地を中心にした日米両軍の臨戦体制ともいえる状況でしたが、その沖縄の4月1日は、過去に何度も深い傷を負わされた日なのです。前から書いている400年前の薩摩藩による琉球国への武力侵略で、首里城への攻撃が始まったのがその日。それから336年後の1945年には、米軍が沖縄本島に上陸、地獄を幾つも集めたと言われる沖縄の上陸戦が始まった日で、上陸部隊の米兵が「エイプリルフールではないか」と疑ったのは有名な逸話。そして、サンフランシスコ条約と日米安保条約が発効して日本が占領下からの「独立」を果たした一方で、

米軍支配下に置かれた沖縄で、琉球政府が発足したのもこの日でした。その日を境に数年間は、米軍の銃剣とブルトナーによる土地強奪と島ぐるみ闘争の嵐が吹き荒れ、今日まで続く米軍の不沈空母の始まりでした。

そして今年、辺野古の新基地建設に向けての対米公約に縛られている防衛省・沖縄防衛局は、実に5400ページに及ぶ環境影響評価(アセスメント)準備書を県などに提出しました。その準備書は、まさに米国の軍事戦略に沿って辺野古沿岸に巨大な海兵隊基地を作るという目的に向かって作られたものであり、とても環境評価の名に値しない長いだけもの。

辺野古の新基地建設阻止の沖縄御万人の闘いは、1997年の名護市民投票の反対決定以来、何度も日本政府と沖縄県や名護市の妥協と建設強政策を打ち破って来ました。その力は、沖縄内外の自然保護団体はもとより、国際自然保護連合(ICUN)をも動かし、海域のジュゴン保護勧告案を3度も採択。そしていよいよ、これからの数年、とりわけ2014年までに完成を目指す日米軍事再編との対決となることを覚悟し、これまでの勝利の重みを決定的な勝利に結びつける闘いが、歴史的な重みを持ったこの日から始まったといえます。

石垣港への強行接岸も4月1日

更に、米軍の軍事行動の横暴さと日本政府の隷属性を示したのが、佐世保基地所属の第7艦隊所属の掃海艦パトリオットとガーディアンの石垣港強行接岸です。それまで港湾管理者の大浜長照石垣市長が、入港反対を通告していたにもかかわらず、2隻は4月1日に、うるま市の米海軍ホワイトビーチを出港していたのです。

ここ数年来日米両軍は、宮古・八重山・与那国という先島地域を中国と対抗するための軍事拠点化を狙ってきました。今回の強行入港も、昨年の与那国港に引き続くもの。その軍事戦略による入港に反対する労働者市民約300人は、シュプレヒコールをしたり、港から出ようとする米軍車両を阻止し、ケビン・メア在沖米総領事や米海軍兵士らと激しくもみ合ったとのこと。更に、道路交通法違反で逮捕するという警察の恫喝に対しては、市長が先頭に

立って港内にある2カ所のゲートに移動して座り込み、スクラムを組んで米軍関係者を乗せた車両の出入りを妨害。5時間以上にわたって、命どう宝を守るための果敢な闘いを展開し、殆どの米兵を艦内に缶詰状態に追い込んだというのです。

その後日談として、入港に反対する団体「いしがき女性9条の会」が港湾施設のフェンス外側に取り付け、その後なくなっていた横断幕を、同艦の艦長が米軍捜査機関を通じて、八重山署に引き渡していたことが分かったのです。

掃海艦の入港した3日午前縦1メートル、横3メートルの横断幕「NO WARSHIP(軍艦はいらない)」を内側に向けて取り付け、両端の4カ所をビニールひもなどで固定していたものを、米軍の誰かが引きちぎっていたということ。石垣署は、掃海艦の出港後の5日午後、米軍捜査機関の関係者が「艦長から提出を受けた」と横断幕を引き渡したということで、窃盗容疑で捜査しているということです。

世界平和を希求する4月1日

そうした4月1日、沖縄那覇市の自衛隊基地内の返還させた約100坪民有地で、2002年から作られていた花畑で「セレブレーション・アースピース・ギャザリング4.1地球が笑う日～個人が力を取り戻し、地球を癒すときが来た～」というイベントが行なわれました。

その中心メンバーは、土地の所有者で長い長い活動暦をもつ「風の里」のオーナー高江洲朝男さん。今は参議院議員の天才音楽家喜納昌吉さん。革新、人権派弁護士として県知事選挙にも立候補したことのある大先輩の金城睦さん。

そして、イギリス人のポール・コールマン、アースウォーカー・環境活動家。1995年に戦時下で包囲されていたサラエボまで歩き、一本の木を植えて以来、アマゾンのジャングルからジンバブエの高地まであらゆる人々に平和と環境保護を訴え、4万7000キロ、39カ国を歩居てきた人。2000年からは、20世紀に戦争で亡くなった人々のために1億本の木を植えるキャンペーンを始め、多くの支援者を得て1130万本以上の木を植えてきたという。

そうした凄い人たちに惹かれて多くの若者たちが結集し、これから6ヶ月間、地球を祝い、平和

を祝い、9月21日の国際平和デーに沖縄から地球平和宣言をするピースキャンペーン「セレブレーション・アース」を全国展開するというものです。

実は、その前日の31日、沖縄を離れる日に私はどうしても「風の里」に行きたくなって高江洲さんご夫婦と素敵な時間を過ごしました。その時に私が提唱している琉球独立平和村とこの沖縄から地球平和宣言をするという発想がぴったりと重なった気がしました。

その主旨は次の通りです。「大地や風、太陽、星や月と対話しながら世界中を歩き、戦争で亡くなった人の数だけ木を植え続けるアース・ウォーカーがいます。世界平和を希求し、沖縄古来の伝統船サバニを漕ぎ続け、人と人、島と島とを結び、祭りを起こす祭りがいます。

軍事基地として奪われた先祖伝来の土地を取り戻し、花園に変えた人がいます。訪れる旅人を温かく迎え入れ、沖縄の肝心(ちむぐくる)を広めている人がいます。人知れず世界の平和を祈り続けている無数の人々がいます。

今から400年前の4月1日、薩摩藩は首里城を占領しました。64年前の4月1日には、米軍が沖縄本島に上陸しました。沖縄の米軍基地の問題や、復帰後の大規模開発などを巡る本土との不自然な関係も、元を辿ればこの4月1日から始まっています。

国連は今年を「国際和解年」に制定しています。私たちセレブレーション・アース実行委員会は沖縄、日本にとって大きな歴史的節目である4月1日に、地球に感謝し祝っていくことで、過去に負った痛みを癒し、平和を実現させていく発想のもと、「地球が笑う日～個人が力を取り戻し、地球を癒す時が来た～」と題したピース・ギャザリングを行います。

雨が降らなければ、空に虹はかかりません。地球の涙に虹がかかるまで、沖縄から世界へ、地球に生きる喜びをお祝いする潮流をつくりだしていきましょう。そして今ここから、新しい豊かな時代ミルクュー(弥勒世)を漕ぎ寄せ、未来へ希望の種を蒔く歩みを共に始めて行こうではありませんか。」

「グアム移転協定」を糾弾する

こうした世界平和に向けての沖縄からの活動の一方では、沖縄を未来永劫不沈空母とし続けようとする日米両国政府の軍事政策が、米軍再編の一環である「グアム協定」でした。

その協定では、嘉手納以南の基地の統合ならびに返還、グアムへの移転、普天間の移設がパッケージであることを強調し、まさに辺野古への基地建設の強行を宣言。辺野古への基地建設に反対した沖縄県議会決議や、基地に反対する75%の世論を押しつぶすだけでなく、例えば民主党中心の政権になっても1兆円とも3兆円とも言われた2014年までの財政出動に縛りをかける米国への約束手形なのです。

そして国会では、新年度予算を成立させたことを受けて日米軍事再編に反対した小沢一郎失脚を狙った国策捜査・検察クーデターによる世論操作やいわゆる「北朝鮮の衛星、ミサイル危機」との相乗効果を生かして与党ペースでの審議強行が続いたのです。

この間首都圏で辺野古新基地建設に反対し続けている実行委員会は、全国から「7.18沖縄県議会決議を尊重し、辺野古新基地建設の断念を求める請願署名」約13万筆を集め、国会の場に辺野古への基地建設に反対している沖縄御万人の声を届け、「グアム移転協定」を絶対に批准させない行動を展開してきました。

そして、沖縄県議会決議を実現するための要請団が、国会議員や多くの支援者ともども国会議員や政府関係機関を丸まる2日間かけて行動したのですが、衆議院外務委員会から本会議であっさり成立。参議院での反対があっても外交条約の衆議院優先によって協定が批准されるということになりました。

問題を拡大させるな

そして麻生自公政権は、このグアム移転協定を衆議院で可決した勢いで、同じ日に海賊対処派兵新法の審議開始を強行。それも、この間二度も自衛隊法の海上警備行動を逸脱した外国船籍への警備活動を実施していることも理由にして早期成立を図るという横暴さです。

更に問題は拡大しています。この国会審議の最中に、浜田防衛大臣が海上自衛隊のP3C対潜哨戒機2機の派遣準備命令を出したのです。

しかも、そのための準備が既に3月段階から密かに進められていたのです。それは自衛隊の活動拠点としてジブチ共和国に基地を建設するための地位協定を結んでいたというものです。それを「今度の協定は海外の組織を受け入れるものではなく、日本の自衛隊を受け入れてもらう特権・免除などの優位的なものだから国会の承認は必要ない」という答弁を中曽根外務大臣が発言しているのです。

いつの間にか自衛隊の海外派兵だけでなく海外基地まで造ることを国会で公然と発言することが出来るようになったのでしょうか。そうした中で、この6月からはインド洋に約1000名の自衛隊員が海上自衛隊の軍艦4隻とP3C対潜哨戒機による米軍との共同作戦に従事することになるのです。そのための共同演習が、沖縄で、ハワイ、グアム、そして日本全国で繰り返し行われてきたということです。

そして、こういう現実を当たり前だと思わせる空気のようなものが、沖縄だけでなく日本全体を覆っていたのではないのでしょうか。これまでも何度もあった「北朝鮮」ミサイル、核疑惑、拉致問題の嵐です。その頂点が、4月5日の「飛翔体」発射だったのでしょうか。問題は、そこに向かう中で何がどうしてどうなったかということです。殆どのマスコミが、誤発射報道というおまけつきで政府の発表を嘗ての大本営並みに報道したということです。もう一つ大事な何がということでは、米軍と自衛隊が一体となってイージス艦とPAC3ミサイル防衛網が張り巡らされる中で、防衛大臣が迎撃のために「破壊措置命令」を出したということです。

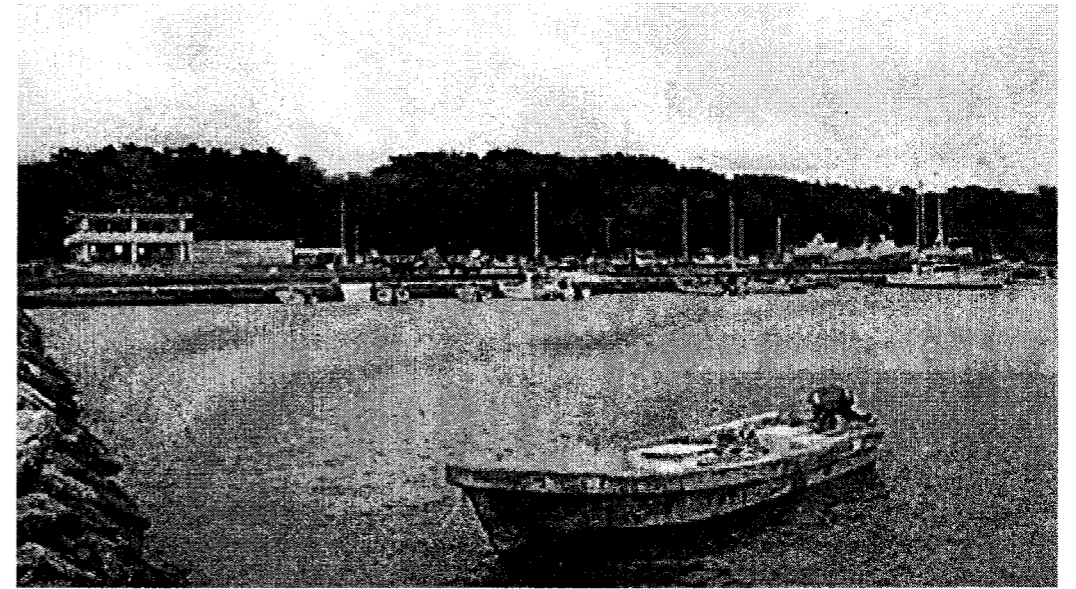
ことほど左様に、知らない内にごちゃごちゃと軍事的緊張が高まっていることは、米国発の経済恐慌から派生する世界的な実経済と金融の崩壊や政治危機を理由にした新たな需要創出という戦争への道につながる一本筋ではないのでしょうか。それもグリーンニューディールを掲げるオバマ大統領の下で着々と進められていると言っても過言ではないと思っています。

というのも、ルーズベルトが1932年に掲げたニューディール政策は、その後の国際金融協調政策が保護主義に陥って破綻。その挙句に第二次世界大戦によって戦争特需が米国に集中して世界経済の主導権を確立したというのが真実の歴史であり、そのきっかけを与えたのが日本軍による真珠湾攻撃だったからです。最大の危機は、変革のチャンスであると言うのは、私たちの抵抗精神であると同時に支配者たちの戦略でもあるのです。それを巧みに表現して民衆の結集力としたのが、オバマ大統領のチェンジの本性であると思っています。

オキナワから、前向きに

最後に沖縄の報告として、前号にも触れた「薩摩の琉球支配から400年・日本国の琉球処分130年を問うシンポジウム・大激論会」が3月29日、約300名が参加して那覇市で開かれました。第1部では近世の薩琉関係について琉球大学教授の豊見山和行氏が基調講演。パネルディスカッションでは沖縄本島のほか、宮古、八重山、奄美の各地域からパネリストが参加。第2部の激論会で、首都圏からの参加者として、「400年の歴史を総括しているのは、現在も軍事基地があり植民地状態にあるという沖縄の現実だ。それだけに辺野古の新基地を作らないこと、全ての基地を撤去することが何よりも必要だ」ということと「未来に向かって琉球の島々を二度と戦場にさせない非武装地域とするための独立運動を始めるべきだ。具体的には『復帰』直後の『金武湾を守る会』の闘いから生まれた『海と大地と共同の力による自立・独立』と80年代以来の一坪反戦地主運動の原点『全ての軍事基地を生活と生産の場に』を結合させた5千坪の恩納村の県民の森の入り口の土地に『琉球独立平和村(仮称)』を作りたい」と提案させてもらいました。

それに対してすばらしい反応があり、早速翌日には、辺野古の座り込みから恩納村現地への実施踏査が行なわれたのです。そして、金城実さん本人も一緒にその土地に行ってくれたのですが、金城さんの100メートルのレリーフも含めて彫刻作品の常設展示場を作るという最初の計画がほぼ固まりました。



静かな辺野古漁港 (09/4/24、辺野古浜通信より)

しかし、沖縄の現実と近未来は、益々厳しさを深めていると言わざるをえません。それは経済的な自立を阻む観光経済と公共事業依存への傾斜が深まっているからです。実はその恩納村も含め沖縄の自然破壊と観光ホテルの乱立は留まるところを知りません。具体的には、旧米軍恩納通信所跡地にフォーシーズンズホテルなどを運営するベルジャヤランド社(マレーシア)がリゾートホテルを計画。今帰仁村渡喜仁にクロスリゾート今帰仁(名古屋市、渡辺浩司社長)リゾートホテルの開発計画。ザ・テラスホテルズ(名護市、国場幸伸社長)が読谷村宇座に富裕層向けのコンドミニウム型リゾートホテルを早ければ6から8月にも着工し2010年内の完成を目指す。「リーガロイヤルホテル」グループを展開するロイヤルホテル(大阪市)が、那覇市旭

町の再開発地区に富裕層向けの宿泊特化型ホテルを2012年春に開業すると発表など。今までに開発された観光地が廃墟になっている所もある中で、更に開発を進めるということは文字通りの自然破壊に他なりません。そして、何よりも沖縄の土地が外資や平和を求めない他者に奪われることを意味します。

これから数年が、命どう宝ネットワークを広げ、私たち自身による平和と独立に向かっての本当の意味での正念場だと思います。そこで6月には、私たちの世代を中心にして「沖縄シニア平和ツアー」を企画しています。そして、有名な城山三郎氏の本で紹介されていた伊達政宗の60歳の時の名句「残軀楽しまざるべけんや」そのままに「やるっきゃない」楽しさ全快で一緒に行きましょう。

(おおた たけじ)

オキナワの基地の一ヶ月

09.3.22 ~ 09.4.20



飛行再開したF15戦闘機（嘉手納、08.01.15、リムピース提供）

皆川みずる

● 3月22日

軍用地などの財産を管理する金武町伊芸の伊芸財産保全会（島袋正治会長）は22日夕、総会を開き、保全会が米軍キャンプ・ハンセン内7カ所を持つ約32万6000平方メートルの軍用地について、これまで沖縄防衛局と交わしてきた賃貸借契約を2010年度以降は締結しないことを決めた。

原因究明が進まない金武町伊芸被弾事件や度重なる騒音被害などに対する抗議の意志を示すため。同会が契約を拒否するのは1986年の設立以来初めて。保全会の会員数は275人。同会は軍用地料で年間約4600万円の収入がある。

● 3月24日

米海軍掃海艦2隻が4月3～5日まで石垣港に寄港する計画について、石垣市（大浜長照市長）は24日、記者会見を開き「市民の安心安全を守る観点から（寄港には）同意できない。石垣港は超過密で軍艦が入れる余地はない。また民間港であり、軍艦が入ることは想定していない。事故が考えられ、港湾管理上、受け入れられない」として反対する意向を示した。さらに市長名でオバマ米大統領に「石垣市は米軍艦船の入港は歓迎できないことをご理解いただき、ご英断いただきたい」との文書を同日、郵送したことも明らかにした。

● 3月25日

米空軍最新鋭のF22ステルス戦闘機が25日午前10時ごろ（現地時間）、米カリフォルニア州エドワーズ空軍基地から約55キロ北東の砂漠地帯で試験飛行中に墜落し、操縦士の男性（49）が死亡した。事故原因は調査中。墜落機と同型機が今年1月から、嘉手納基地に12機1時配備されており、同基地の第18航空団報道部は「現時点で上級司令部から嘉手納での飛行運用を変更するような指示は一切受けていない」と通常通り、訓練を継続する考えを示した。嘉手納基地のF22は、4月中旬に帰還予定。

● 3月27日

米空軍最新鋭のF22ステルス戦闘機12機が一時配備されている米空軍嘉手納基地で27日午前、新たに別の基地所属の「F22」4機がグアムから飛来し、嘉手納のF22と共同訓練をした。嘉手納町に事前連絡はなかった。嘉手納基地報道部によると、27日飛来したF22は、28日以降も嘉手納配備の機体と別の訓練も計画しており、30日の週初めにグアムに戻る予定。4機は、米アラスカ州エレメンドルフ空軍基地所属、現在はグアムに一時配備されている。尾翼の「AK」が目印。

● 3月30日

県建設産業団体連合会の呉屋守将会長らは30日、県庁で記者会見し、在沖海兵隊のグアム移転に伴う整備事業への県内企業参入を目指し、1カ月程度をめどに建設会社や銀行などさまざまな業種と連携して新組織を立ち上げると発表した。

移転に伴う施設・インフラ整備の日本政府負担費約6000億円のうち、600億円（約10%）程度の工事受注を目指す。組織形態は今後、関係機関への出資金要請や意見交換などを行った上で決定する。組織設立後は現地の住宅・インフラ整備の実施主体となるSPE（特定目的機関）への参入を図る。

● 4月1日

嘉手納町基地渉外課は1日、米空軍嘉手納基地の2008年度騒音発生回数（速報値）を発表した。同町で騒音が最も激しい地区の屋良では、70デシベル以上が3万9357回と過去5年間で最大の数値となった。同課は「外来機が例年より増加したため」と分析した。

沖縄防衛局は1日、米軍普天間飛行場代替施設建設に伴う環境影響評価（アセスメント）の準備書を県、名護市、宜野座村に提出した。準備書には、飛行場施設の配置計画で方法書に記載されていなかったヘリコプター離着陸帯（ヘリパッド）など新たな施設が複数追加された。また県が求めていたジュゴンや海藻草類などの複数年調査や実機調査も実施されていないことが明らかになった。沖合移動を求めている名護市試案を含む6案と政府案を環境面で検討した上で「大差ない」との認識を示し、政府案の優位性に資材運搬などの施工性の良さ、反対派の阻止行動の可能性なども視野に入れた制限水域内での事業の実行可能性などを挙げた。

在沖米海兵隊は1日、2008年12月の金武町伊芸被弾事件で独自調査を終え、結果概要を発表した。「最近の訓練とは関係ないとの結論に至った。すべての実弾訓練は安全基準をすべて順守している。被害者が示した事件日時と実弾訓練実施日時とは一致しない」と発見銃弾と米軍訓練の関係をあためて否定した。同日、県警に報告書を提出、県と沖縄防衛局、外務省沖縄事務所に概要を報告した。報告書自体は公表していない。

● 4月2日

2日午前8時55分ごろ、米軍伊江島補助飛行場上空で、パラシュート降下訓練を実施していた米兵一人が、降下ミスで基地フェンス外約30メートルの黙認耕作地に着陸した。けが人はいなかったが、作物の葉タバコ7本が被害を受けた。大城勝正村長は「大きな事故につながらなかったが、大変遺憾。米軍側に強く申し入れる」と強く抗議した。降下訓練に参加したのは読谷村の米陸軍トリステーション所属の兵士。C-130輸送機から6人がパラシュートで降下したが、一人が基地フェンス外に着地した。その後訓練は中止された。

● 4月3日

沖縄防衛局から県基地対策課に入った連絡によると、3日午前8時5分ごろ、恩納村の米軍キャンプ・ハンセン内レンジ8付近で火災が発生した。米軍の射撃訓練が原因。ヘリコプターによる消火活動で午前10時15分ごろ鎮火した。

米海軍の掃海艦パトリオット（1、369トン、85人乗り組み）とガーディアン（同）の2隻が3日午前、大浜長照石垣市長の反対や市民らの抗議行動の中、石垣港に強行入港した。入港時には米軍に抗議する市民ら200人以上が集結。昼前には市街地につながるゲートを封鎖した。ケビン・メア在沖米総領事やパトリオットのロバート・シュウ艦長（少佐）らは約5時間足止めされたが、八重山署員の護衛で市民の座り込みを強行突破し、一時騒然となった。米軍艦の民間港への寄港は復帰後2度目で同港には初めて。2007年6月には両掃海艦が与那国町祖納港に入港、08年11月には米海軍のヘリ2機が市民との交流目的で石垣空港を使用するなど米軍の民間港・空港利用が相次いでいる。仲井真弘多知事は「緊急事態でもなく、親善目的で緊急性はない」と不快感を示し、大浜長照石垣市長は「市民感情に配慮を欠いた一方的な押し付け」とし、強行入港に遺憾の意を表し、強く抗議した。メア総領事は「目的は乗組員の休養と沖縄の市民との友好交流。加えてこの地域での米海軍の行動が日米安保体制の下の日本の防衛に貢献し、地域全体の安定と安全に寄与する」と話した。

月刊キャッチピース No.162 2009.04.20. 1988年6月18日第三種郵便認可（通巻239号）15

● 4月4日

北朝鮮が「人工衛星」と主張する長距離弾道ミサイルの発射を想定し、嘉手納基地では4日午前5時56分ごろ、電子偵察機 RC135S（通称コブラボール）が離陸。7時35分ごろには2機目が離陸した。

4日午前6時3分ごろ、那覇市の国道58号松山交差点で、黒っぽいYナンバーの乗用車が横断歩道を渡っていた男女3人をひいて逃走したとの通報が那覇署にあった。3人は病院へ搬送されたが、命に別条はないという。

米海軍掃海艦2隻の石垣港寄港で、市民らが港湾区域境界の金網に掲示していた入港反対を訴える横断幕が4日朝、なくなっているのが見つかった。同日、八重山署が盗難事件として捜査を始めた。地元や捜査関係者によると、港湾内の監視カメラに米兵らしき2人が横断幕を持ち去る姿が映っていた。八重山署は映像の提供を受け、米軍側に捜査協力を依頼した。盗難に遭ったのは、「いしがき女性9条の会」の縦1メートル、横3メートルの布製横断幕で、「NO WAR SHIP（軍艦はいらない）」の文字と会の名称が記されていた。3日午前の抗議集会後、掃海艦を望むフェンスの外側に張り付けていた。入港反対の横断幕をめぐっては、入港前の3月31日に市街地中心交差点で高教組八重山支部の「入港反対」の横断幕が盗まれた。掃海艦2隻が石垣港に寄港し2日目の4日も市民の阻止行動が続いた。幹部以外の兵士らの外出に、入港に反対する市民が約70人の「人間の壁」で阻止したが、約30人の警察官が市民らを取り囲んだ結果、米兵らが初めて街へ出て、買い物や観光を楽しんだ。阻止行動は、米軍関係者の乗った車の出入りのたびに行われた。

● 4月5日

嘉手納基地では4日に続いて5日7時55分ごろ、電子偵察機 RC135S（通称コブラボール）とE3空中早期警戒管制機が離陸。9時10分ごろにKC135空中給油機が離陸した。

石垣港に初寄港していた米海軍掃海艦「パトリオット」と「ガーディアン」は5日昼、市民団体らの抗議の中、出港した。同日会見した大浜長照石垣市長は抗議声明を発表。「一方的かつ強権的な暴挙だ」と強い憤りを表明した。

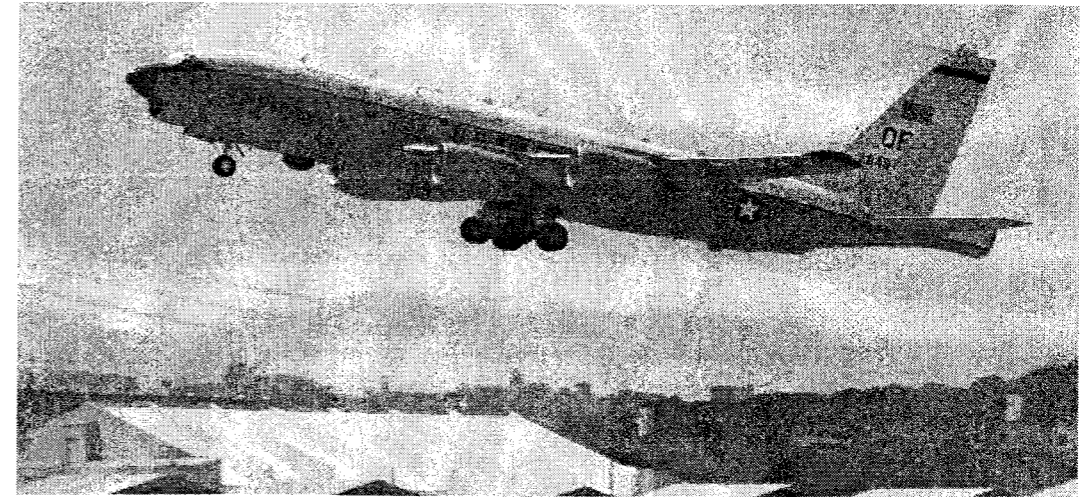
● 4月8日

米海軍掃海艦2隻の石垣港寄港に反対する市民が港湾区域境界の金網に掲示していた入港反対を訴える横断幕が盗まれた事件で、掃海艦の艦長が米海軍捜査機関を通じて横断幕を八重山署に渡していたことが8日、分かった。同署によると、掃海艦出港後の5日午後、米海軍捜査機関が八重山署に横断幕を届けた。同署は渡した艦長の所属船名や所持していた理由などの詳細は捜査中として明らかにしていない。現在、横断幕は署内で保管しており、同署は「引き続き米海軍の捜査機関と協力し、窃盗容疑で捜査する」としている。被害届を出した同会事務局長の大島忠枝さん（64）が、盗難に遭った横断幕を7日午前署内で確認した。「両端がガザガザに破れていた。たぶん取るときに有刺鉄線にかかったのだと思うが、心がずたずたに踏みにじられたという思い。悔しくて涙が出そうだった」と話した。メア総領事は出港直前の5日午前11時半ごろ、記者団のインタビューに応じ、「盗難事件があるかどうかは分からないし、だれか捨てられたごみを片付けたというふうに見える」と発言していた。

那覇市の松山交差点で4日発生した男女3人が重傷を負ったひき逃げ事件で、那覇署が参考人として事情を聴いている米海兵隊員が、事件当時に運転していたことを認める供述をしていたことが8日、捜査関係者の話で分かった。同署は同日午後から、同乗していたとみられる別の米海兵隊員からも事情を聴いた。同署は逮捕状請求による身柄引き渡しを米側に要求するか、不拘束で書類送検するか、さらに検討を進める。

ひき逃げ事件で骨盤骨折などの重傷を負った会社員男性（24）によると、米軍捜査機関の職員が6日、男性が入院する病室を訪ね「運転していた米兵の上官が謝罪したいと話している」と伝えた。防衛省によると、在日米軍の軍人、軍属の行為で被害を受けた際の損害賠償請求は、公務外の場合、直接示談のやり取りをするのが原則。加害者が賠償金を支払えないなど、示談で解決が難しい場合は米政府が補償金を支払う。

宜野湾市の米軍キャンプ瑞慶覧内で排出された廃棄物の中から、アスベスト（石綿）が検出されていた



嘉手納基地の電子偵察機 RC135U コンバットセント機 (09/4/18、リムピース提供)

ことが8日、分かった。中部福祉保健所が同基地内から読谷村の廃棄物集積場に運ばれた廃棄物を調査して判明した。同基地内では現在、米軍住宅139棟の空調ダクトなどの撤去作業が行われている。解体作業などで建物にアスベストが含まれている場合、大気汚染防止法や労働安全衛生法などにに基づき、飛散防止措置が義務づけられているが、基地内の工事現場では現在、同措置が取られている形跡はない。

基地内の廃棄物はコンテナに入れられて6日午後、読谷村内の廃棄物集積場に搬出された。その後、工事に携わっていた男性が「アスベストが不適切に処理されている」と宜野湾市に通報し、市の連絡を受けた中部福祉保健所の職員が集積場で確認し、立ち会いの下でサンプルを採取した。成分を分析したところアスベストが検出された。

● 4月9日

嘉手納町基地渉外課は9日、米軍嘉手納基地の2008年度騒音発生回数（確定値）を発表した。嘉手納地区の深夜一早朝間（午後10時—午前6時）の騒音発生回数は前年度に比べ約2倍の4231回と、1999年度の騒音測定開始以来、最多を記録した。騒音が最も激しい屋良地区の発生回数を初めて上回った。日中を含めた年間の発生回数では屋良地区が3万9357回と前年度に続き最多となった。

● 4月10日

米軍キャンプ瑞慶覧内で排出された廃棄物からアスベスト（石綿）が検出された問題で、米軍基地内でのアスベストの取り扱いに関する日米間の取り決めがあるにもかかわらず、守られていない可能性があることが10日、分かった。

● 4月13日

米空軍最新鋭のF22戦闘機1機が13日午後3時50分ごろ、一時配備されている嘉手納基地に緊急着陸した。着陸後、牽引車（けんいんしゃ）で駐機場へ運ばれた。

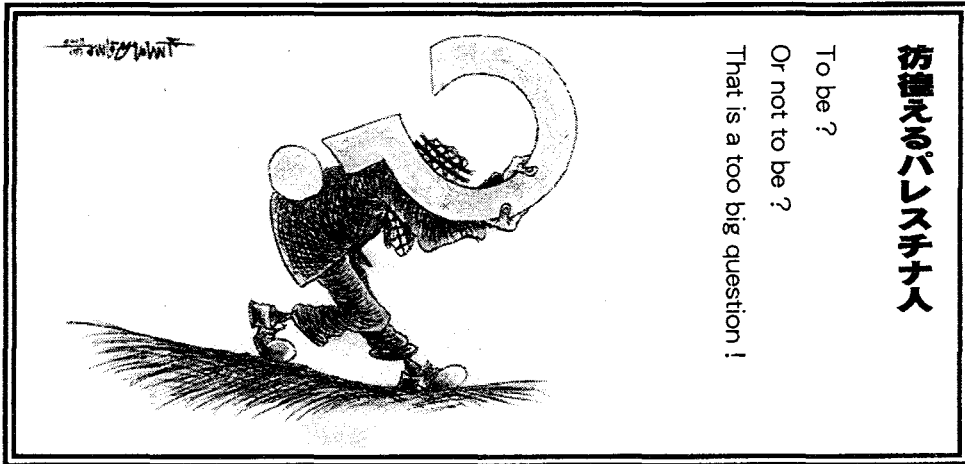
沖縄防衛局の真部朗局長は13日午後、米軍キャンプ瑞慶覧の廃棄物からアスベスト（石綿）が検出された問題で、同施設に立ち入り、工事現場を視察した。同問題発覚後、日本側が立ち入るのは初めて。防衛局によると、米軍側はアスベスト除去工事などの認識があったことを明らかにした。だが、日米間で取り決めたにもかかわらず、アスベスト除去の際の地元通知がなかったことについての言及はなかった。真部局長は安全性確保まで廃棄物を搬出しないよう申し入れた。

● 4月19日

1月から米軍嘉手納基地に一時配備されている米空軍最新鋭のF22戦闘機12機のうち6機が19日午前6時ごろ、平均94.2デシベル（騒々しい工場内の音に相当）の騒音を響かせながら米本土に向け飛び立った。
(みながわ みずゑ)

彷徨えるパレスチナ人

To be ?
Or not to be ?
That is a too big question !

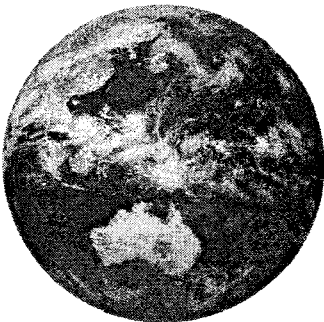


編集室から

◎某 SMAP メンバーの、公園での行動が逐一報道されるのを見るにつけ、今ミサイルを発射すれば、なんにも問題にならないかも、と独り言つ。その一方で、小さな子供についての大きな情報が、しかるべき人の耳に入らない。警察の怠慢に憤慨！

◎酒を飲んだつもりが酒に呑まれ、芸人が深夜の公園でパンツを脱いだとて、それも愛嬌。そんなことで大騒ぎするマスコミの野次馬根性にはただ呆れて「愚！」の音も出ない。もっと真剣に報ずることがあるだろうに。なにがエゴだ！公共の電波をもっと大事にしろ！

Global Vision !



会計報告 (09.03.21 ~ 09.04.20)

【収入】

1 先月からの繰越		195,146
2 当期の収入	3,000	
(1)会費収入	0	
①維持団体	0	
②維持個人	0	
③参加団体	0	
④参加個人	0	
⑤通信会員	3,000	
(2)カンパ収入	0	
(3)運動収入	0	
(4)預金利子・資料収入	0	

【支出】

3 当期の支出		47,840
(1)郵送費	26,360	
(2)文具・備品	13,160	
(3)振込手数料	80	
(4)分担金	0	
(5)ロッカー代	6,120	
(6)雑費・備品	2,120	

【残高】

4 次月への繰越		150,306
----------	--	---------

月刊「キャッチピース」発行●脱軍備ネットワーク・キャッチピース 編集●キャッチピース編集委員会
 連絡先連絡先●232-0065 横浜市港北区高田高田東 3-38-15 田巻一彦方 電話・fax ●045-531-1341 e-Mail ●QZT04441@nifty.com
 郵便振替口座●00160-7-136148 「キャッチピース」定価●100円 (通信会員年間3,000円)